ルネサンスを旅する日本の若者たち
――『天正遣欧使節記』に見るグランドツアー

根占献一

はじめに

「Magi―天正遣欧使節」という映像がリリースされるという。原作は若桑みどり『クアトロ・ラガッツィ――天正少年使節と世界帝国』（集英社、二〇〇三年）に基づく。Magiとはマギ、東方の三博士あるいは三王を意味し、これもまた同著が「少年たち」（ラガッツィ）四人（クアトロ）のうち一人が有難いことに病気になって一人欠け、三人になったがゆえに、ビデオのほうはマギが前面に出ているのだろう。

ここにはいくつかの問題点がある。マギとはそもそもキリスト教徒ではなかった。四人はすでにキリスト教徒であった。ただしまだイエズス会には入会していない。後に派遣され、これまた有名な支倉常長は非キリスト教徒として出発して太平洋に出た。残念ながら西方メキシコから来たので、マギの一人とは認定されにくかった。

ラガッツィは少年だけを指さずに、場合によっては年長になっても呼びかけなどに使われる用法である。英語のboysに相当し、日本で広く知られているBoys, be ambitious !の時、札幌農学校の学生たちであるこのboysを「少年」とするには躊躇するだろう。場合によっては、「青年よ」と訳出されてもいよう。あの天正遣欧使節の一行たちがあの時代の年齢から考えると、今日の少年相当かどうかは怪しむに足りる。元服式が一四歳前後であったことを思えば、この年齢のなかにあった彼らを単純に少年とするわけにはいかないだろう。彼らの旅路に注目した古典的作品は少なくない。浜田青陵『天正遣欧使節記』（一九三一年、岩波書店）はその嚆矢に数えて良い。浜田作は「少年」であることを題名では謳っていない。これに対し、キリシタン学に大いに貢献した松田毅一の数ある著作の中にある一冊は『天正少年使節』（一九六五年、角川書店）である[1]。

本稿はイタリア半島を旅する一行に注目する。イタリア各地をほぼ遍く旅した天正遣欧使節一行の宗教的、文化的出会いをルネサンス文化のなかで捉え、その意義を探ることはきわめて魅力的な試みである。そのために、好材料を提供するのが、旅する彼らの記録となっている『天正遣欧使節記』（*De missione legatorum Japoniensium ad Romanam curiam, rebusque in Europa, ac toto itinere animadversis dialogus*, in Macaensi portu Sinici regni, anno 1590）[2]の叙述である。彼らの見聞・言動を時代のなかで検討し、またその後の史的展開のなかで浮かび上がってくる課題を提示したい。

（一）学校

キリスト教が伝来した一五四九年からのおよそ百年の間は、日本史上「キリシタンの世紀」として注目されている。このキリシタン（切支丹）はキリスト教徒ということだろうが、世紀にかかる形容詞ともみなされよう[3]。この概念を弘めるのに貢献している学者はボクサーである[4]。カトリック世界の宣教師たち、ヨーロッパ・ラテン世界の

スペイン、ポルトガル、そしてイタリアに属する人たちが来日し、キリシタン、カトリック教徒が日本に誕生した時代のことである。この意義は限りなく大きい。ひとつは仏教伝来から一千年後の出来事であり、ヨーロッパの異なる宗教がいかなる影響を日本列島に及ぼしたのかは考察に値しよう。

そして訪日した外国人が大体南欧地域に限られていたことも見逃せない。そのことは少し時間が経った、同じアジアの清の時代に比較すると明らかである。明・清時代も日本の場合と同様イタリア出身の宣教師に事欠かないと言っても、フランスの影響が強まり、またドイツなどの北方ヨーロッパ出身の宣教師の姿も見られたからである。日本に北ヨーロッパ出身者が主に来るのは江戸時代に入ってからのことであり、特に俗人たちがオランダ人、あるいはその一行の一人としてオランダ以外の北欧人が江戸に参府する時となろう。南蛮人から紅毛人へとヨーロッパの地域が移動したことを意味する。

また、ヨーロッパで同時代にイエズス会の学校が叢生したように、日本列島にもイエズス会教育方針に基づく学校が創設された意義も大きい。当地では期間も短く、全く限定した数しか存在しなかったが、隣国の明・清とは明らかに教育・学校事情が異なっている。さらに外国語であるオランダ語や中国語が一子相伝であるかのように家ごとに通詞が存在した江戸時代とも異なっている。これらの相違は、イタリア系イエズス会宣教師アレッサンドロ・ヴァリニャーノの構想に基づくところが大きいであろう[5]。

使節一行の中心メンバーたちはまだ青少年期であり、なにもかも貪欲に吸収できる年ごろであった。伊東マンショ、千々和ミゲル、中原ジュリアン、それに原マルチノ。少年少女の段階をとっくに過ぎた者ならば良く分かるのであるが、この時期は特に物覚えに優れ、限りなくあらゆる教科に対応できる度合いが高い。そのことが経験上、了解できる。また学ぶところは家の中、教室だけではない。外の空気に触れて体験学習からも学ぶことができる。これはひとつの真理であり、小学校時代の遠足や中・高の修学旅行、大学ではゼミ研修旅行などが浮かぶ。キリシタン時代のイエズス会の学校ではこの遠足、エクスカーションの類が取り入れられていた[6]。

しかしここで考えてみたいのは、長年月をかけた、一五八二年に九州長崎を出てポルトガル、スペイン、そしてイタリアを巡歴した、いわゆる天正遣欧使節の連泊の旅から知られる教育の意義である。教室から離れて、現地で実際の建物や作品を見て、じかに学ぶことができた一行の話である。とくに多感な時期の若者たちには大いなる刺激となったことだろう。目くるめく世界が万華鏡を覗くように眼前に展開されていたことであろう。

天正遣欧使節については既述のように使節の前に「少年」を付けて、何かしら幼い子供たちであったことを強調したがる傾向がある。やはりこの時代の「元服」の年齢を思い出すべきではないか。体格は大きくなくとも、精神はすでに大人になりかかった人たちだったのではなかろうか。しかもまったくのタブラ・ラーサ（白紙）状態で彼らは出かけたわけでなく、ラテン語の学知、食卓上のエチケット、テーブルマナー、ダンス、社交術のかなりのレベルに達して渡航し、現地で応用する準備はすでにできていた。

あるいはまた、彼らが纏う着衣、服装に関しても言えるであろう。残された伊東マンショと歳の行った支倉常長の各肖像画から若者たちのほうは洋装であることが分かる。明治維新後に米欧回覧の旅に出た大久保利通や木戸孝允らの衣装、洋装が思い起されよう。こうして同時代の支倉とはもちろん、のちの時代の大久保や木戸との年齢の相違

は重要であろうし、近いところの支倉がラテン語を学んで出かけたとは聞かない。島国英国の若者たちがイタリアを最終的に目指して、学校教育の仕上げとしての実見・体験のグランドツアーを敢行する慣行を思い起こすほうが日本の「少年」たちには妥当しているのかもしれない。

論の冒頭ですでに書いたことを強調のために繰り返そう。若者たちはイエズス会の方針に従っていたが、所属していたわけではなかった。同会会員になるのは日本に戻ってからの話である。だからと言って、彼らは異教徒として出かけたのではない。すでにれっきとした「キリシタン」であった。ローマで病気中の中原ジュリアンに教皇謁見が叶わなかったことを捉えて、意図的に三人とし、「東方三博士（マギ）」にしたのだという主張は面白い思いつきではある。

だが、この異教の賢者に擬えるのはまちがいであろう。彼ら若者たちの出生背景を考慮すると、三王に擬えるほうが適切かも分からないものの、王でなかったことも確かである。近東オリエントの王たちが異教徒であることに変わりはない。伊東マンショ以下、いずれもすでに異教徒でなく、キリスト教世界が非ヨーロッパの地に広がっている証人として東方から遠路はるばる旅を重ねてきた極東人であった。

（二）大学

使節をヨーロッパに派遣することを思いつき、実施した中心人物はイタリア出身のイエズス会士アレッサンドロ・ヴァリニャーノ（一五三九－一六〇六）である。同じくイエズス会に属し、ヴァリニャーノのほぼ一世代先輩にあたるフランシスコ・ザビエル（一五〇六－一五五二）がキリスト教を伝えていたが、ザビエル自身、日本で得た信者の若者を南欧に送ろうと思った。そのひとりがベルナルドである。ベルナルドも亦、イタリアに行くが、最終目的地はポルトガルにあり、コインブラで亡くなった。使節一行が行かなかったナポリにも足を運んでいる。今日、ザビエルを故郷鹿児島に案内したヤジロウとともに師ザビエルの元、同郷人ベルナルドの全身像が鹿児島市内で見られる。

ザビエル公園（鹿児島市）。筆者撮影

ところで、ザビエルの生年とヴァリニャーノの没年の間には百年があり、時代差とともに両人の出自や経験の違いが布教活動に反映されている。ともに大学出のイエズス会士だが、ザビエルはフランスのパリ大学の、ヴァリニャーノはイタリアのパドヴァ大学の出であった。大学によく使われるのは最高学府という言葉であり、大国フランスのパリ大学に似合いとされているようだ。そこで学んできたザビエルがやってきたというわけである。そのザビエルが日本に大学を探したこともよく知られていて[7]、場合によっては教科書にも出る。

この時代はフランス、英国、イタリアなどの間では学部にそれぞれ特徴があり、今日的価値観の「最高学府」という思い込みから彼らは

大学を選んだわけではなかった。地域による学部の相違が意味を有する時代であり、何を専攻するかが優先された。一一世紀のボローニャから西欧の大学の歴史が始まった。その大学は神学部、法学部、医学部、学芸学部（人文学部）と基本的には四学部構成であった。そして神学部ならパリかオックスフォードで、法学部ならイタリアとされた。その法学部はイタリアではボローニャが有力であったが[8]、もうひとつ、ボローニャに次ぐ古さを誇るパドヴァ大学の法学部もまた重要だった。

ザビエルの父は異国の地のボローニャで法律を学び、ヴァリニャーノはヴェネツィア共和国内の大学町パドヴァでかなり長期にわたって同じく法律の勉強を続けている。ザビエルの父は役人を目指して法を学んだ。ヴァリニャーノもあとでは一大方向転換をなしてイエズス会の学校でさらに学び、修練することになるが、この時点で聖職者をめざしていたわけではなかった。せいぜいが教皇領の教会国家内での官職を志向してのことであったろう。

それにイタリアの大学構成には大きな特徴があった。アルプス北側やイベリア半島、あるいはイングランドの大学との相違として、ここでは神学部が欠けていたことである。分かりやすい一例を挙げると、後世に名を残す、ナポリ出身のトマス・アクィナスは神学専修のためにパリに行くのである。トマスは一三世紀の人物であるが、この特徴は維持された。

神学部が欠けているということは他にどのような結果をもたらすのか。この時代、「万学の師」（ダンテの言）である哲学者アリストテレスなしには考えられない組織が大学であった。哲学は「神学の婢女」と言われた有名な格言は、イタリアの大学でなく、パリ大学などに該当しよう。イタリアではアリストテレスは神学生のために存在したのでなく、理性の範囲内での経験的な人間世界の解明を目指す学生のためにこのギリシア哲学が教授された。それにパドヴァ大学は医学部の存在により、自然科学の研究も盛んであった。天正遣欧使節の若者たちと同時代人になるガリレオ・ガリレイと縁が深い大学であった。使節一行たちの秋（とき）は「科学革命」の世紀、一七世紀に向かっていた。ヴァリニャーノのモノを見る眼差しにはこのような大学で知るアリストテレス哲学が基本にあるように思われる。彼がアジア各地で、就中日本で、ヒトを見る時にはこのイタリアで受容されたアリストテレスの伝統に啓発されていたのではないだろうか。

論理の組み立て方として議論の筋道がスコラ学的方法と呼ばれるものであったことはまちがいない。この方法はルネサンスでも消失しない。むしろ新スコラ学の展開により、あるいはイエズス会がトマス・アクィナスの神学を受け入れたことにより近世以降新たな展開を見せる。ただし利用されるアリストテレスがギリシア語原典に立ち返り、人文主義的に理解されるようになった点は見落とせないであろう。そしてそれまで知られていなかった『詩学』とともにアリストテレス初の全集が印刷刊行された地はまさにヴェネツィアにおいてであった。それは一四九五年から九八年かけて、また一五〇八年にアルド・マヌツィオによって印行された。さらにこの全集には当時はアリストテレス作品とされた応用学的な『機械学』も含まれていた。ますます時代のニーズに応える書物となる。

（三）技術・芸術

使節一行はヨーロッパ社会での科学技術の実態をも知る必要があった。それは特に活版印刷技術と水道技術に焦点があったように思われる。活版は当時の新しいテクノロジーである。東洋、日本は紙、

和紙が発達し、木版印刷も古来盛んであった。ここで問題となるのは金属活字印刷である。ヴァリニャーノはこの先端技術を学ばせるために、もう一人の若者を使節一行に加えている。コンスタンティーノ・ドラードで、日本人としての名前は不明であるが、ジョルジョ・デ・ロヨラとともにポルトガル上陸後から周到な計画の下で研鑽を積んだ。これは帰国後に学んだ技術力が遺憾なく発揮されることになろう。

イタリアの水道土木技術は高く、古代ローマ以来の伝統が水道設備には活かされ、今でもその遺跡に圧倒される。ルネサンスにおいては特に噴水の技術、テクノロジーが高度化されて、貴族たちや商人たちの郊外の別荘は大規模な庭園のなかの観覧娯楽施設ともなっていた。『天正遣欧使節記』にはその描写が幾つも見られる。メディチ家の別荘プラトリーノの水道技術・噴水技術はヨーロッパ中に広く知られ、またアッペニーノ山脈を擬人化した巨人像があることでも有名だった。またローマに入る直前、ヴィテルボ近郊のバニャイアの別荘ヴィッラ・ランテ(写真参照)やファルネーゼ家のカプラローラの別荘の庭園・噴水も劣らず詳しく語られている。ローマ滞在中はむろん郊外のティヴォリの別荘の噴水技術が讃えられる。「われわれは、そこで、俗にオルガンと呼ばれる楽器が、巧みに凝らして流される水の力に押されてあたかも熟練した鳴らし手がかたわらについているかのように、夜鶯が妙なる歌をいとも巧みにならすのを聞いた。」[9]

石造りの高層建造物にはリスボン上陸後、ポルトガル、スペイン、そしてイタリアと賛辞と驚嘆を惜しんでいない。それでもローマのコロッセオなどに見られるコンクリート建築の具体的な記述は見当たらず、その名が挙げられているに過ぎない。古典、ウィトルーウィウス『建築書』(*De architectura*)がよく読まれていた時代であるので、教養

バニャイア(ヴィテルボ近郊)ヴィッラ・ランテ庭園(筆者撮影)

人であったヴァリニャーノはおそらく題名は知っていたであろうし、パッラーディオ建築を好んだヴェネツィア貴族には特に好まれた書籍であった。建物の主要関心は宮殿、別墅のヴィッラ、そして何といっても教会建造物ということになろう。

ハードの設備とは異なるが、芸術表現の相違には明らかに気づいていて、これまた注目される。それは油絵や壁画の存在であり、その手法である。この時期、ルネサンス期に視覚芸術の分野で鮮やかな展開が見られたので、否応なしに使節一行の眼に即座かつ華やかに飛び込んできたであろう。しかもこの場合、何もキリスト教が主題の絵だけに限定されるわけではない。すでに断続的に一八年間続いたトレント公会議が終わり、芸術様式としてはバロックに差し掛かろうとする時に、使節一行はプロテスタントが否定し、破壊の限りを尽くしたマリア像や聖人像がここイタリアでは一段と盛んに描かれている現場に立ちあったのである。またそれだけではない。文字通りルネサンスらしく蘇った異教芸術にも接する機会が多々あった。

しかも風雨に打たれ、晒される建物外壁に絵が描かれているのを知るのである。木で出来、紙の上に描く日本では想像が難しい絵の存在である。外壁に描かれた絵画装飾には感心した様子が『天正遣欧使節記』から分かる。実際に現地に行ったことのない者にはそのことはなかなか理解しがたいことだろうとされる。実際そうであろう。貿易立国ヴェネツィア共和国には幾つかの商館が運河沿いに立ち並んでいた。ドイツ商館、フォンダコ・デイ・テデスキもそのひとつで外面壁画はヴェネツィア・ルネサンスを代表する画家たち、ジョルジョーネとティツィアーノの手になるものであった[10]。現代のわれわれはもはやそのまま見ることはできないのだが、使節一行は異教文化の絵を見ることができた。出来上がって数十年がすでに経過していたが、フレスコ画で制作されているため剥げ落ちない、と説明されている。木と紙ででき、室内画が当たり前だった日本から見ると、それは稀有な体験であった。

水墨画という白黒の世界に対し、カラフルな油絵の世界が当時の日本人を惹き付けたことも注目されて良いだろう。最初にキリスト教を伝えたザビエルが持ってきた聖画像は鹿児島の人たちを魅惑した。使節一行の代表者伊東マンショはフィレンツェのピッティ宮殿でそのような肖像画、それも世俗女性が描かれた絵を欲しがったと出てくる[11]。彼ら一行が戻ってから、画像制作の授業もイエズス会は日本に導入するし、そのための専門のイエズス会所属の教師も招かれることになる。これは信仰や布教のために磔刑像や聖母マリア像は必要とされた要因が大きいが、私たちの祖先がこれらを表わす手段、技術にも惹き付けられる面があったからではないだろうか。それはまたトレント公会議以後のカトリック教会の狙いとも一致していたのである。

このとき、中世ヨーロッパの時代にゴシック聖堂の彫像が文盲の人たちの教科書がわりとなっていた、つまり文字ではなく彫刻が教育の代わりをしてくれたという、よく引かれる事例を考えてはいけないだろう。なぜなら使節一行は目に一丁字がなかったわけでは決してなかったからである。それどころかすでにラテン語も勉強していた若者たちであった。そしてなによりもルネサンスの時代の出来事であり、中世とは異なる。一行が丹念に旅した先はその本場のイタリアであった。造型芸術、視覚芸術が花咲いていた。教会、聖堂に入り、各礼拝堂を一巡しても、宮殿、パラッツォを訪れて各部屋に招かれても、もう至るところ壁面に鮮やかな絵画を目の当たりにした。また壁画だけ

ではない。額に収められた絵画、タブローやすでに建築から自立した彫像を何枚も幾体も見ることができた。

（四）古典

イタリア・ルネサンスはギリシャ・ローマの異教の学術・文芸が蘇り、復興した時代と言われる。宣教師が著述したにもかかわらず、『天正遣欧使節記』にはその古典の事例が出るのは珍しくない。引用にその典拠が示されていないものの、見当がつく古典は多い。対話一五に画家ティマンテスの逸話が千々石ミゲルの口から語られる。ヨーロッパのいろいろな書物に伝えられているとあるが、おそらくもっとも重要な典拠は、ルネサンス時代に非常に読まれ、よく利用されたプリニウス『博物誌』（*Naturalis Historia*）であったろう[12]。悲しみの顔を表現できず、その顔を画家がヴェールで覆った顰（ひそみ）に倣い、南欧を旅しながら瞥見した、巧妙な技術に基づく建造物、また都市のたたずまいが言葉で上手く伝えられないということを言わんとして、この事例を語っている。

さらにこの古典典拠の好例を引用してみよう。ギリシャ・ローマ神話に登場する三人の女神、三美神。各々が視覚的に異なった角度の肢体を見せて、美、愛、優美あるいは慎み（castitas）を表わす。ルネサンス以後、夥しいほどの数の三美神が描かれているが、ボッティチェッリ〈プリマヴェーラ（春）〉のなかの彼女たちは特に名高い。使節一行が訪れるほぼ百年前に描かれた、フィレンツェ・ルネサンスを代表する作品である。この作品かどうかは分からないが、一行が彼女たちを描いた絵や壁画を見ても不思議ではない。

そのことは、使節のひとり原マルチノのアレッサンドロ・ヴァリニャーノへの感謝の演説に現われる。「昔の人たちが私たちのために残してくれました三人のグレース、美神たちのあの有名な画、それには彼女たちの顔にことに著しい朗らかな喜びが現われ、手に手を組んで離れても互いに必ず寄り集まって来る彼女たちのグループを描いています・・・」とある。実はこのグレースの意味はローマの哲学者セネカの『恩恵論』（*De beneficiis*）から引用され、使節派遣を思いつき、実現させたヴァリニャーノへの感謝の意を持たせるのである。「と言いますのは、この画像によってもっとも賢明な人々は、あるいは幾らかでも高尚な精神を持つほどの人々は、恩恵、恩寵の授受に際して、おのずから守られるべき二つの決まりを指摘しようとするでありましょうから。つまり、施すほうの人々の顔は朗らかであるよう、受けとるほうの人はできるだけ早く受けた恩寵に利を添えて返すようにということであります。」[13]

この一文からラテン文学中の重要なストア派の哲学者セネカの代表作の一点が知られていること、また異教のテーマ作品であるが、日常的な道徳律に還元されていることが分かる。同時代のヒューマニストの中には文献学、史料批判の発展により、セネカと聖パウロの間の往復書簡に疑念を差しはさむ者も現れていたが、ここではそれは問題になっていず、セネカはキリスト教徒として見られていたことであろう。ローマの恋愛詩人オウィディウスさえも「道徳化されたオウィディウス」とされて、中世以来の長く読み継がれてきた伝統があった。セネカはさらに、中世以来パウロと含蓄に富む思想を手紙形式で交換した同時代人と信じられていて、その書簡集まで存在した。

イエズス会は周知のように人文主義、ヒューマニズム教育に力を入れ、本場ヨーロッパに限らず、日本など世界各地で古典語教育に力を入れた修道会であった[14]。取り上げられた古代ラテン文学の中でも、キケロやウェルギリウス、プリニウスらと並んでセネカはとても重要

であった。セネカにはまた悲劇の演劇作品もある。イエズス会が演劇を教育に活かしたこともよく知られているので、この点で古代ローマの哲学上の二巨人キケロとセネカのうち、キケロに演劇作品が見られないことを考えると、ルネサンスに与えた意味合いには異なる点があることになる。

（五）政治と宗教

ヴァリニャーノの教育上の狙いはこのような「グランドツアー」を通して実現されようとした。この巡察使はヴェネツィア生まれでなく、南のアブルッツォの出身であったが、パドヴァ大学法学部で学んだだけにヴェネツィア本島をもよく知っていた。今日では島のほうにも大学があるが、この当時は半島陸地（terraferma）のほうにしかなく、それがパドヴァ大学であった。この大学の意義についてはすでに述べた。

なお、このヴェネツィア共和国を数ある島だけで考えるのは間違っている。遠く黒海方面や東地中海にも植民地を持っていただけでなく、イタリア本土の陸地深く広がっていた、当時ヨーロッパ有数の共和国家であった。『天正遣欧使節記』にはスペイン王国、教皇領国家と同盟してヴェネツィアがトルコに勝利を収めたレパントの海戦（一五七一年）への詳しい言及がある。またその際、キリスト教の大敵としてのイスラム教が強く非難されている[15]。

使節一行はこの共和国に最も長く滞在し、島と言わず陸地と言わず広く旅したのである。本島滞在期間も長く、伊東マンショを始めとする一行の肖像画が描かれる余裕があったし、当地にはこの共和国が抱える「御用絵師」が存在していたのである。統領府官邸を飾る一行の絵は残念ながら実現しなかったが、ヴェネツィア共和国内のヴィチェンツァでは観劇し、また歓待された様子を今に伝えるオリンピコ劇場（Teatro Olimpico）壁画が残っている。

ルネサンス時代のイタリア半島における二大共和国というと、このヴェネツィア共和国とフィレンツェ共和国であったが、前者が一八世紀末まで独立した共和国として存在したのに対し、後者フィレンツェは使節一行が訪問した頃はすでにメディチ家の統治するトスカーナ大公国に変貌を遂げていた。そしてこのメディチ家からこの上ない歓待を受けることになる。ここもまた統治した領域は広く、使節一行がスペインの港を出てイタリア半島に初上陸したのは同公国のリヴォルノの町であった。こののちピサでの祝宴があり、トスカーナ大公国の都フィレンツェに入る。

彼ら一行の、三〇年も前にひとりの日本人がやはりイエズス会の働きとフランシスコ・ザビエルの願いにより、このルネサンス都市に来ていた。一六世紀半ば頃のことで、まだイグナティウス・デ・ロヨラもローマで健在なころである。既出のようにベルナルドという名前しかわかっていない。天正遣欧使節も初めはこの先例同様にひそやかな旅を行い、俗人世界と接触する機会が少なくなるようイタリア各地のイエズス会の施設に宿泊する予定であった。メディチ家はこれを許さず、かなり大っぴらになってしまった。否、ポルトガル、スペインと経てきて、イタリアの支配者や教会関係者は一行到来を心待ちに待っていたのである。

この当時のメディチ家はもはや私たちが知っているメディチ宮殿（Palazzo Medici）中心の生活ではない。共和国時代のメディチ家ではなくなっている。住まい、住居はシニョリーア宮殿、パラッツォ・ヴェッキョであり、ピッティ宮殿であった。共和制時代の象徴的建物がこの中世以来のパラッツォ・ヴェッキョであったが、ルネサンス

に入り、さらにメディチの館に変わると、室内は大きく変わり、同家好みの壁画で埋め尽くされた。たとえば、「百合の間」（La Sala dei Gigli）にそのことを窺うことができる。フィレンツェ司教に関わる聖人と古代ローマ史の人物たち――ドメニコ・デル・ギルランダイオとその工房作――が同一空間の同じ壁面に大きく描かれていて、使節一行は異教ローマとキリスト教の歴史が関連しあっていることを否応なく感じ取ったことだろう。

このフィレンツェの教会で彼らはたいへん貴重な体験をすることになる。それは聖母マリア信仰というカトリックには欠かせぬ体験であった。市内には数多くの聖堂があるが、そのことを窺い知るに最適な教会はサンティッシマ・アンヌンツィアータ聖堂である。そしてここには霊験あらたかなマリア像があることで名高く、フィレンツェ市民のこの聖母のある教会に寄せる思いには並々ならぬものがあった。そもそもこのフィレンツェは聖母都市である。カテドラーレ、大聖堂は花の聖母大聖堂、サンタ・マリア・デル・フィオーレと呼ばれる。中世ではサンタ・レパラータと呼ばれていたが、この呼び名に変わった。そして新年の始まりは三月二五日、つまりマリアが神の子を身ごもったお告げを大天使ガブリエルから受けた日を年の初めとしていた国家であった。そのなかに数多くの教会があるが、わけても重要な教会が、聖なることこの上ない、お告げの教会という名を持つ、このサンティッシマ・アンヌンツィアータ教会だったのである。

使節一行の噂が町中に広がっていた。イエズス会内の制限された旅ではもはや全くなく、市民の多くが知ってしまっていた。このことはマキャヴェリの子孫が書き残している日記からも分かるが[16]、この教会に使節一行が来て、普段はなかなか見ることができない聖母像を見られるという評判が立ってしまっていた。このため一行は二度にわたって聖堂に入れない事態が生じてしまう。漸く三度目、人々がまだ動き回らない早朝にこの聖堂を訪れて、拝顔するということになった。このように予想できないほどの大騒ぎとなったわけだが、過密都市ならではの光景だったのだろう[17]。

だが、このようなフィレンツェでの体験を筆頭に、キリスト教の要に位置する聖母マリアということが了解されたのではなかろうか。使節が訪れたヨーロッパでは宗教改革が起こり、聖人崇拝に限らず、聖母を否定するプロテスタントのキリスト教徒が生まれていた。これに対してイタリアでは中世以来のキリスト教信仰が続いていた。現在でもイタリアの教会に行けば、宗教改革に無関係に聖母も聖人もまた聖遺骨も健在である。

使節一行の先人ベルナルドの旅はトレント公会議前期の頃であったが、伊東マンショらの旅は同会議が終了し、カトリック教会の指針が明確化されたのちの旅でもあった。ルネサンス・宗教改革以前の中世的伝統のかくなる心性、メンタリティは重視されるべきであろう。ヴァリニャーノは現地での実見と経験に基づいて、ヨーロッパとはなにか、カトリックのキリスト教という宗教はどのような宗教なのかに接してもらいたかったことであろう。

ポルトガル、スペイン、イタリアの町ごとの教会で礼拝堂に描かれた聖人、聖女たち、あるいは彼ら、彼女らの名を負う教会、そしてその聖遺物とその崇拝が否定されない宗教世界が厳然としてあり、それが日常的に信徒たちの生活を形成していた。使節はサンティッシマ・アンヌンツィアータのように描かれた聖母像でなく、場合によっては教会に収められている聖骸とも対面する。女性の聖者ではアッシジでは聖クララ（キアラ）、ボローニャでは聖カテリーナ、そしてロレー

トでは神の母マリアの家を見ることになるのである。教皇領国家の大都市での聖カテリーナの叙述は以下のようにある。「われわれが拝観したのはすでに二百年も以前になくなった」聖女であるが、「まだ生きているかのように生気があるばかりか、不思議なことに、横にはならないで座っている」聖骸であった[18]。

（六）科学革命

これまでヴァリニャーノや使節の旅について述べてきた。使節の旅行中、ヴァリニャーノはインドのゴアに留まり、母国にも母校の町にも行かなかった。使節に同行したのは信頼厚いイエズス会士メスキータであった。そして戻ってきた一行を待ち構えて書き上げられたのが『天正遣欧使節記』である。一行の見聞を確認しながら、叙述が行われたことであろう。またそれは在日本のイエズス会学校で教科書として使用される予定であった。ラテン語で書かれており、地理や歴史の学習となったことだろう。ヴァリニャーノが日本の衣食住に関して東西の相違を感じたように、同使節記では日本とヨーロッパ、イタリアのこれらの違いが文明論の視点から述べられている。その一端は既に本論で記した。

また科学技術の観点からは、ヨーロッパの先進性が強調されている。行論上、すでに本論で「科学革命」という術語も使用した。一七世紀ヨーロッパの科学革命は機械論哲学の発展と連関し、世界、宇宙とキリスト教の神の関係が新たに問われることになる。その際に機械、器具で例証に上がる代表がゼンマイ仕掛けの時計である。この種の西欧（置き）時計、「大きな精巧な時計」の類はザビエルがすでに山口で領主大内氏への贈呈品の一つに入っていた。

『天正遣欧使節記』ではトレドの町で水道技術とともに時計装置（天文時計）が詳しく紹介されている[19]。製作者はクレモーナ出身のジャンネッロ・トッリアーノ（Gianello Torriano, 或いは Giovanni Torriani. 一五〇〇頃－一五八五）で、使節一行がここを訪ねたころは最晩年のトッリアーノが居たことになる。時計がさらに精巧となるには一七世紀の科学革命の一翼を担うクリスティアーン・ホイヘンスの登場によってである。日本での時計の意義は機械論の象徴となるのでなく、優れた機械を作りだすことのできる西欧という認識に留まっている。

ところで、使節一行の南欧の旅は現地の人々やこれから宣教に赴きたい聖職者を大いに刺激するところがあった。またザビエル以来、日本人が宇宙はどのように成り立っているのかに強い関心を有して問いかけるがゆえに、この方面の自然哲学的知識に富む学者タイプの司祭が必要とされてきた。そこでアリストテレス哲学に通じ、実地体験を重視するヴァリニャーノが白羽の矢を放ったのがペドロ・ゴメスであった。ゴメスの『講義要綱』はコレッジョで使われた教科書である[20]。

一七世紀以降の科学革命ではアリストテレスの宇宙論に代わって数学に基づく天文学に変わっていくのだが、日本では所謂鎖国状態に入ってゆき、そのような発展を見ることができなかった。『鎖国』の和辻哲郎流に呼べば、それは日本の悲劇となろう[21]。従ってゴメスの場合、天文学者でなく自然哲学者として日本人の疑問に答えることになる。そして「デザインからの証明」としてこの方面の研究は割と明らかにされてきた。それはやはりアリストテレス的な目的論的証明の一環であった。

だが、この宇宙が比喩として時計のような精巧な機械であれば、この機械を作った職人のような神の存在が考えられるとしても、自動的

に動いていくこの機械はネジを巻いてくれる段階では神が必要だろうが、そのあとは、神は休むか、あるいは止まりかけるとネジを巻き直すか、あるいは故障した際に修繕をするか、そのような休み多い職に変わってしまい、全時代を通じてたゆみなくは全知全能の神の意志が働かない状況となってしまう。そうであれば、時代ごとに人間と神の関係が異なることになり、神の裁きは緊張感のない状態に陥ることになろう。

さらに近代に入ると、機械論だけでなく原子論哲学もまた勢いを増してくる。原子論的物質論もまた霊魂とかあるいは意志とかを問題にすることなく、生成の過程を説明する。近代思想史では原子よりもさらに粒子レベルの概念が適切かも知れないが、原子であれ、粒子であれ、これらの相互の関係性の中からこの世界が生じたのであるとすれば、神そのものが不必要となり、創造する神を前提とするキリスト教にとっては大きな痛手となり、まさに無神論の段階に突き進むことになる。トマス・ホッブズが代表的思想家として登場しよう。

日本キリシタン史上の思想レベルではもちろんそこまでの「境位」にさえ達することはなかった。なぜならば、その前に鎖国を迎え、科学革命中のキリスト教神学も以後のカトリック神学も日本に入ってくることはなくなったからである。蘭学はキリスト教的神を前提にせずに自然、宇宙を研究することが可能な一七世紀以降のヨーロッパの知のあり方を如実に示している。キリシタン時代は日本人が信じている宗教が真正であるかどうかを問題にした。その真正さには究極なるものが本物であるかどうかが掛かっていた。自然、宇宙もまたその究極なるもの、神を知らしめてくれるかどうかが鍵であった。この完璧な世界を造り、動かす存在が前提にならなければならなかった。デザインからの証明というのはそのような類いの証明である[22]。

おわりに

『天正遣欧使節記』では千々石ミゲルが解説役を務めている。これはヴァリニャーノがその役にふさわしいと判断していたからであろう。この千々石はしかしのちに棄教する。一行はイベリア半島に較べて町（都市）がはるかに多い、イタリア半島地域に非常に長く滞在した。特にヴェネツィア共和国がそうであった。この当時のヴェネツィアは半島の陸地部と繋がっていず、数多くの島々から成り立つ都市国家だった。ヴァリニャーノには思い出の学生の地であり、パドヴァ大学は本土側にあった。またエルサレムへの東方巡礼を目指す港町としても知られていて、イエズス会の創始者イグナティウス・デ・ロヨラと仲間のザビエルたちはかつてここからエルサレム出航を企図したことがあった。オスマン帝国の介在がこれを容易に許さなくなって久しかった。

またイタリア半島南部の大都市ナポリには事情があって行けなかった。それは使節たちには悔やまれることであったが、さも見てきたかのように詳しい説明がミゲルによりなされている。ここは王国であり、スペイン統治下にあった。ナポリに滞在すれば、若桑が言う「世界帝国」に触れることになったのかもしれない。一行は夏季の暑熱を避けるためにナポリを外したと、『天正遣欧使節記』ではなっているが、当地では反スペインの暴動が起こっていて、極東の若者にカトリック世界の悪印象を与えない配慮がなされたようである[23]。

日本の領域は地球上に引かれた教皇境界線によりポルトガルの布教管轄下、パドロアード（padroado. 布教保護権）にあったが、ポルトガルの場合、「世界帝国」と呼ばれうるかは問題であろう。世界帝国

を言うのであれば、それは世紀が改まった一七世紀の支倉常長の慶長使節こそが世界帝国スペインを体験することになるであろう[24]。こちらはあくまでも「大人」の俗人身分の一行であった。彼ら一行ののちメキシコやスペインにはハポン（日本）姓の日系（?）子孫が誕生し、今日までつながっているという。

このようなことは天正遣欧使節には起こりようがなかった。しかし滞欧した天正遣欧使節への関心の高さはイタリアで刊行された数々の印刷物が示している[25]。そしてこれらは後世への日本情報源となったであろう。本論が引用してきた『天正遣欧使節記』は教科書としてヨーロッパ情報源となる予定であった。キリスト教禁止令がこれを不可能としたが、ルネサンス文化を吸収したヴァリニャーノの筆致は往時の質の良い一次史料であり、日欧交流史の初期情報として高い価値を保持している。

【注】

1　次の小著には言及している章が含まれる。根占献一『東西ルネサンスの邂逅―南蛮と禰寝氏の歴史的世界を求めて』（東信堂、一九九八年）。また最近、伊川健二『世界史のなかの天正遣欧使節』吉川弘文館、二〇一七年、が公刊された。

2　原書はラテン語である。邦訳はデ・サンデ『天正遣欧使節記』泉井久之助・長澤信寿・三谷昇二・角南一郎、新異国叢書5、雄松堂、一九九〇年（一九六九年）。イタリア語訳にAlessandro Valignano, *Dialogo sulla missione degli ambasciatori giapponesi alla curia romana e sulle cose osservate in Europa e durante tutto il viaggio* basate sul diario degli ambasciatori e tradotto in latino da Duarte de Sande, sacerdote della Compagnia di Gesù, a cura di Marisa di Russo. Traduzione di Pia Assunta Airoldi. Presentazione di Dacia Maraini, Firenze, 2016. 以下、邦訳、伊訳として引用する。

3　the Chistian century という成句がたとえば、Elisabeth Feist Hirsch, The Discoveries and Humanist Thinking, in *Bibliotheca Docet*. Erasmus Buchhandlung, Amsterdam 1963, pp. 385-397: 391.

4　多数の著書があるなか、次の一書が該当しよう。Charles R. Boxer, *The Christian Century in Japan 1549-1650*, Manchester 1993 (1951).

5　桑原直己『キリシタン時代とイエズス会教育――アレッサンドロ・ヴァリニャーノの旅路』知泉書館、二〇一七年。

6　片岡千鶴子『八良尾のセミナリオ』、キリシタン文化研究会、一九七〇年。

7　川瀬一馬『増補新訂 足利学校の研究』吉川弘文館、二〇一五（一九四八）年。

8　久保正幡「大学とは何か――ボローニァの歴史を顧みて思う」、『國學院大學日本文化研究所紀要』第四二輯、昭和五三年九月、一六三－一八八頁。ボローニャ大学に較べてパドヴァ大学があまり知られていないと思われるので、日本の大学史専門研究者の間でパドヴァ大学の研究が進むことを願っている。

9　邦訳『天正遣欧使節記』、四三三頁。伊訳、p.339.

10　エドガー・ウィント『ジョルジョーネ解読』森田義之・甲斐教之訳、中央公論美術出版、二〇〇九年。

11　根占献一「天正遣欧使節が出会った人、出会わなかった人――細川ガラシャと同時代を生きたイタリア女性たちを中心に」、『学習院女子大学紀要』第二〇号、二〇一八年、七九－九三頁、特に八九頁。

12　邦訳、二四一頁。伊訳、p.208.『プリニウスの博物誌』第3巻、中野定男・中野里美・中野美代訳、雄山閣、二〇〇一年第六版、一四二二頁下段。

13　邦訳『天正遣欧使節記』には「原マルチノの演術」が含まれる。六九九－七一二、特に六九九頁。また伊訳版にもdocumento 2 として所収されている。pp.537-543, in particolare p.537. 小川正廣訳「セネカ　恩恵について」、『セネカ哲学全集』2、倫理論集Ⅱ、岩波書店、二〇〇六年、一七三頁以下。

14　クラウス・ルーメル『自由教育思想の系譜――プラトンからモンテッソーリまで』南窓社、一九七六年、特に第七章。イエズス会教育史使徒職国際委員会編『イエズス会の教育の特徴』高祖敏明訳、サンパウロ、一九八八年。

15　邦訳、二二九頁。伊訳、p.201.

16　『イタリアルネサンスとアジア日本――ヒューマニズム・アリストテレス主義・プラトン主義』知泉書館、二〇一七年、一七頁。

17　根占「天正遣欧使節が出会った人、出会わなかった人」、八九頁。

18　邦訳、四九〇頁。伊訳、p.379.

19 邦訳、三一七頁。伊訳、p.256.

20 『イエズス会日本コレジョの講義要綱』尾原悟編著、全三巻、一九九七－一九九九年、教文館。平岡隆二『南蛮系宇宙論の原典的研究』花書院、二〇一三年。

21 根占献一『ルネサンス文化人の世界』知泉書館、二〇一九年、第一章、参照。

22 D. C. リントバーク、R. L. ナンバーズ編『神と自然――歴史における科学と宗教』渡辺正雄監訳、みすず書房、一九九四年。数多くの論文から成る本書はこの節を書くうえで有意義であった。

23 邦訳、四七六頁。伊訳、p.366. イタリア語版では同頁の注644でナポリ訪問が取りやめになった社会背景を指摘している。

24 「帝国」初期の歴史を視覚的に知るうえで興味深い論文に、Carla Rahn Phillips, Visualizing Imperium: The Virgin of the Seafarers and Spain's Self-Image in the Early Sixteenth Century, in *Renaissance Quarterly* 58 (2005): pp. 815-856. 宮崎和夫「スペイン帝国の成立とローマ帝国」、歴史学研究会編『幻影のローマ――〈伝統〉の継承とイメージの変容』青木書店、二〇〇六年、三四三―三七五頁。

25 Adriana Boscaro, *Sixteenth Century European Printed Works on the First Japanese Mission to Europe. A Descriptive Bibliography*, Leiden, 1973.

追記。二〇二〇年二月一〇日の西日本新聞社会面（電子版）によると、「天草コレジオ」が天草市河浦町にあったとする文書が確認されたとある。そしてその中で同コレジオが「最高学府」と新聞では表現されている。この言葉は拙論で用いたが、イエズス会の学校制度にこれを用いるのは不適切であろう。

（本学教授）